



## 『イチローと対テロ戦争』

国際政治学者 高橋 和夫

「好きな時にチェックアウトはできるが、ホテルを離れてはならない！」

イーグルスのヒット曲『ホテル・カリフォルニア』

### [19回目のシーズン]

もちろんイチローと米国の対テロ戦争の間には何の関係もない。しかしイチローが大リーグで活躍を始めた年に、米国は同時多発テロに襲われた。つまり2001年の9月11日である。その翌月の10月に米国はアフガニスタンでの戦争を開始した。そして今日まで戦い続けている。その後2003年に米国はイラクでも戦争を開始した。一度イラクからは米軍は撤退した。しかし、その後IS（「イスラム国」）が台頭すると、再びイラクに少数ながら米軍が派遣された。さらにISが支配地域を広げていたシリアにも米軍が派遣された。主としてシリアのクルド人勢力の訓練と空軍による支援のためであった。

さて一方でイチローは2019年3月に引退を発表した。長い間の活躍に拍手を送りたい。ところが他方では、米軍は今日も中東で戦い続けている。対テロ戦争は米国史上最長の戦争である。大リーグ風に言えば第19シーズン目である。野球と違い戦争には、シーズン・オフもない。この長い長い戦争の結果、アフガニスタンで2,426名、イラクで4,571名の米軍の将兵が戦死している。これは2019年5月末の数値である。合計で6,997名である。約7千名である。大相撲の夏場所の会場である愛知県体育館の収容人数が7,400名ほどである。あの会場を、95パーセント埋めるほどの戦死者が出ている。あの会場を満席にするほどの死者の横たわる様子を想像できるだろうか。

そして、さらに多くの負傷者も出ている。1960年代から1970年代にかけてのベトナム戦争の際には、米軍に関しては戦死者1に対して3の割合で負傷者が出た。現在では、戦死者と負傷者の比は、1対7とされる。これは戦場で負傷しても迅速に手当を受け生き残る確率が高くなった反映である。米軍の場合、ヘリコプターが戦場に急行して負傷兵を病院に運ぶ。事前に兵士の血液型に対応した輸血用の血液などがヘリコプターに積み込まれているのが通例である。病院への飛行中に緊急の医療が施される仕組みである。こうした措置により負傷兵の9割が生き残る。これは素晴らしい。しかし同時に生き残る将兵の多

くが重い障害を背負っている。

戦死者の7倍の負傷者が出ているとなると、2001年以來の負傷者の総数は、死者7千名の7倍となるので、49,000名である。およそ5万名である。イチローが最後の出場の舞台とした東京ドームの収容人数に近い。想像して欲しい。あの空間一杯に負傷者が横たわっている風景を。そして戦死者も負傷者も、依然として少数とはいえ増え続けている。

しかも五体満足で帰国しても、重い精神的な後遺症を患っている将兵は数知れない。アルコールや薬物への依存症、家庭内暴力などの症例が数多く伝えられている。精神的に病

んでいても、それを知られたくないとの心理も働くために専門家の助けを求めるのにためらいを覚える者も多い。そして毎日毎日、帰還兵が自殺している。その数は年間で6千名にも達する。イラクでの戦死総数を上回る数である。帰還兵にとっては、帰国後も戦闘が続いているかのようである。これが過去18年の戦争で米国の支払ってきた人的な犠牲である。イチローの引退を見て、世界の警察官役に疲れているのに引退を許されない米国の痛みを思った。

### [三度目の「アメリカ・ファースト」]

さて、振り返って見ると、トランプは「アメリカ・ファースト」というスローガンを掲げて2016年の大統領選挙での勝者となった。アメリカ・ファーストとは何か。それは米国が一番で中国が二番というような意味ではない。その意味は、米国の国益が最優先という意味である。国益の具体的な内容は何か。その重要な部分は、米国自身の防衛以外では米国人の赤い血を流さないということである。米国の死活的な利害がかかわらない限り自国民を死なせないという意思表示である。

このスローガンを振りかざして、前回の大統領選挙では、トランプは他の候補を打ち破った。海外への米国の軍事的な関与を批判して支持を集めた。特に重要だったのはイラク戦争批判であった。この戦争を批判したトランプが、共和党の最有力候補と考えられていたジェブ・ブッシュを退けて同党の指名を獲得した。フロリダ州の元知事のジェブ・ブッシュは、兄のジョージ・ブッシュ息子大統領が始めたイラク戦争を支持した。そして他の共和党の候補者もイラク戦争を支持していた。イラク戦争が馬鹿な戦争だと批判したのは共和党の有力候補ではトランプだけであった。

---

#### 筆者紹介

福岡県北九州市生まれ。  
大阪外国語大学外国語学部ペルシア語科卒  
アメリカ合衆国コロンビア大学国際関係論修士  
クウェート大学客員研究員、放送大学教員などを経て2018年より一般社団法人先端技術安全保障研究所会長

[主な著書]

『イランとアメリカ』（朝日新聞出版、2013年）

『イスラム国の野望』（幻冬舎、2015年）

『中東から世界が崩れる』（NHK出版、2016年）

『中東、トランプ、エネルギー』（仮題）（ワニブックス、8月刊行予定）

『パレスチナ問題の展開』（左右社、11月刊行予定）

[ブログなど]

<http://ameblo.jp/t-kazuo>

<https://twitter.com/kazuotakahashi>

<http://www.giest.or.jp>

[https://note.mu/t\\_kazuo](https://note.mu/t_kazuo)

---

トランプは共和党の大統領候補者の指名を獲得したものの、実は共和党の主流の間ではなかった。それゆえ共和党の大半が支持してきたイラクでの戦争を批判できた。しかも民主党のヒラリー・クリントン候補でさえ、上院議員時代にイラク戦争に賛成の投票をしていた。それが2008年の民主党の候補指名を求めての争いで、バラク・オバマに敗れた原因であった。オバマは上院議員の時にイラク戦争に反対の投票をしていた。判断力ではクリントンよりも自分の方が上だとのオバマの言葉に説得力を与えた投票だった。2008年と2016年の大統領選挙では、イラク戦争への賛成投票がヒラリーを最後まで呪ったかのようであった。

話を戻すと、トランプは、終わりのなき戦争に倦み疲れた人々の支持を集めた。そうした厭戦気分を象徴する言葉が「アメリカ・ファースト」である。このファーストに関して重要な点は、これを言うのはトランプがファーストつまり初めてではないという事実である。それでは、誰がトランプの前にアメリカ・ファーストを唱えたのか。

## [リンドバーグ]

最初にアメリカ・ファーストという言葉を使ったのは、1940年から1941年にかけて存在したアメリカ・ファースト委員会である。この委員会の目的は第二次世界大戦への米国の参戦の阻止であった。1939年9月のドイツのポーランド侵攻で第二次世界大戦が始まると、当時の米国のフランクリン・ルーズベルト政権は様々な形で英国への支援を行った。そして、1940年6月にフランスがナチス・ドイツの前に屈服すると、英国は追い詰められた。欧州大陸からのドイツ空軍の爆撃が英本土を襲った。この危機に瀕した大英帝国をルーズベルトは何とか救おうとした。ルーズベルトは米国で生産された軍事物資を英国に送った。

同委員会は、これが米国を戦争に巻き込むとして反対した。その主要なメンバーであったのが、チャールズ・リンドバーグであった。リンドバーグは、1927年に初めて大西洋を単独で無着陸で横断飛行して国民的な英雄となった。「翼よ、あれがパリの灯だ！」の名言で知られる世界的なヒーローである。そればかりか、悲劇のヒーローともなった。というのは、その後の1932年にニュージャージー州にあった自宅から生後20カ月の息子が誘拐され殺害されるという痛ましい事件を経験したからだ。

ちなみに、このリンドバーグの子息の誘拐殺害事件を担当したのは、ニュージャージー州の警察を指揮していたノーマン・シュワルツコフという人物であった。その後の1940年代にシュワルツコフは王制のイランに派遣され、その警察組織の近代化を指導することになる。湾岸戦争の際にペルシア湾岸に派遣され多国籍軍を勝利に導いたノーマン・シュワルツコフ2世の父親である。

さて、英雄リンドバーグなどに主導される米国内の反戦ムードにルーズベルト大統領は



手こずった。リンドバーグは全米を遊説し、激しくルーズベルト政権を批判した。三つの勢力が米国を欧州の戦争に引きずり込もうとしている。第一に英国、第二にユダヤ人、第三にルーズベルト政権である。そうリンドバーグは批判した。アメリカ・ファースト委員会の主張は、広く国民の支持を受けた。そのため、ルーズベルト政権は、英国を助けるための本格的な介入ができなかった。1941年12月の日本の真珠湾攻撃が国内の反戦運動を吹き飛ばすまでは。

## [早過ぎた「トランプ」]

次にアメリカ・ファーストを唱えたのが、パット・ブキャナンである。保守派の論客でレーガン大統領のスピーチ・ライターなどを務めた人物である。このブキャナンが、1992年の大統領選挙で共和党の指名を求めた。当時の共和党には現職の父親ブッシュ大統領がいた。湾岸戦争と冷戦の勝者であった。湾岸戦争の直後には支持率が90パーセントに達していた。この人気の現職の大統領にブキャナンは挑んだ。

そのスローガンがアメリカ・ファーストであった。海外の戦争での勝利を大統領は誇っているが、一般の米国人の生活は良くなっていない。政府は国力を国内に傾注すべきだと外交の大統領ブッシュを批判した。経済が不況局面に入っていた時期だったので、ブキャナンは予備選の始まった段階ではニューハンプシャー州などで善戦した。結局はブッシュが現職の強みで指名を獲得したものの、経済を争点とする候補の共和党内での反乱は本戦に向けての不吉な兆候であった。

そして本選挙では「問題は経済でしょう。お馬鹿さん！」のスローガンの民主党のビル・クリントンに父親ブッシュは敗れた。付言すればブキャナンは移民の制限を訴えた。さらには進化論に反対するなど、キリスト教福音派の票を意識した選挙運動を展開した。振り返って見るとブキャナンは、1992年の早過ぎた「ドナルド・トランプ」だった。

## [新しい「オバマ」]

トランプのアメリカ・ファーストも、このリンドバーグやブキャナンの主張と同根である。別の視点から見ると、スタイルこそ違えトランプは、オバマの海外での軍事介入を嫌う政策を、基本的には受け継いでいる。多量の出血を伴う介入にはオバマ同様に消極的である。北朝鮮の指導者を「チビのロケットマン」と激しく罵った後の金正恩委員長との交渉は、その証左である。外交政策から見れば、トランプは上品さのないオバマである。

このトランプ大統領の姿勢を反映していたのが、シリアから米軍を撤退させるとの昨年末の発表だった。この「突然の」決断は、一部では驚きをもって迎えられた。しかし他の多くの突然の決断と似て、これには兆候があった。たとえば昨年春の記者会見で同大統領は「もう、そろそろ米兵をシリアから帰国させる頃だ」と発言している。

終わりになき戦争への疲労感を背景に、トランプはアメリカ・ファーストという言葉を使ってホワイトハウスの鍵を手にした。シリアからの撤退を決断して何の不思議があるだろうか。何の驚きがあるだろうか。トランプはアメリカ・ファーストの公約を履行しようとしたに過ぎない。驚いてはいけない。同大統領の周辺は、米軍をシリアに残留させて影響力を維持すべきとの立場であった。だが、トランプという人物は、そうした発想には、そもそも懐疑的であった。その後、周辺からの押し返しもあり、米軍の一部が残留すると方針が修正された。しかし、トランプの思考を鮮明に照らし出した発言だった。

繰り返そう、トランプのアメリカ・ファーストは、リンドバーグやブキャナンの主張と同根である。米国の孤立主義の伝統の一番新しい形である。加えて、スタイルこそ違えトランプは、オバマの対外軍事介入に否定的な政策を基本的には受け継いでいる。トランプはクリントンやオバマと同様にブッシュ親子の否定形である。多量の出血を伴う介入には消極的である。

ここで押さえておきたいのは、2017年と2018年のシリアに対する米国の攻撃である。これはシリアのアサド政権による化学兵器の使用に対応したものだ。トランプは、オバマと違い、「赤い線」をアサド政権が越えたので軍事力を行使したと言われた。

赤い線という議論の背景には、オバマによるシリアへの本格的な軍事介入の忌避（きひ）があった。オバマ前大統領は、2012年にシリア政府による化学兵器の使用は「赤い線」であると述べた。つまり、この線をシリアが越えれば米国が対応すると言明した。にもかかわらず2013年に実際に化学兵器が使用された際に、介入しなかった。そしてロシアの協力を得てシリアからの化学兵器の一掃という妥協案を受け入れた。なお、シリアは保有していた化学兵器の多くの部分を廃棄した。しかし、その後もアサド政府軍による化学兵器使用の報道が絶えない。こうした状況から判断すると、化学兵器はシリアから一掃されなかった。

いずれにしろ、赤い線を越えたシリアを攻撃しなかったために、米国への信頼を揺るがしたとオバマは激しく批判されることとなる。オバマの反論は、次のようであった。自分はイラクとアフガニスタンの戦争から手を引くために雇われた大統領である。自分の仕事はシリアで新たな戦争を始めることではない。

それに比べるとトランプは、たとえば2017年4月の攻撃ではシリアに対して59発のトマホーク・クルーズ（巡航）ミサイルを発射した。2018年もクルーズ・ミサイルを使ってシリアを攻撃した。クルーズ・ミサイルは長距離を低空で方向を変えながら飛行して正確に目標に命中する。低空で飛ぶためにレーダーではとらえにくい。しかも途中で方向を変えるので撃墜が困難な兵器である。

トランプのシリア攻撃は、オバマの政策と鮮明な対比をなしていると一部では解説された。しかしである。トマホークの最大の特徴は無人兵器である。つまり、まかり間違っ

も米国兵は死傷しない。トランプは米国将兵の流血を避けるという一点においてはオバマとは何の変わりがない。オバマから一步踏み出した振りをしただけで、実は半歩も前に出ていなかった。オバマでさえ無人殺人飛行機のドローンを多用している。両者に違いがあるだろうか。

ドナルド・トランプという人物は、米国の歴史に脈々と流れる強い保護主義と孤立主義の底流の最新の表出である。そのスタイルに騙（だま）されてはならない。シリアからの撤退の発表にはトランプという人物の個性以上のものがかかわっている。シリアからの撤兵の決断のルーツは思いのほか深い。

なぜトランプが NATO 諸国から朝鮮半島からシリアから、そしてアフガニスタンからの撤兵を語るのか。それは米国民が戦争の連鎖に疲れているからである。アフガニスタンでの戦争というトンネルの向こうに見えたのは出口の光ではなく、新たなイラクでの戦争というトンネルであった。そして、その向こうにはシリアの戦争が見える。戦争というトンネルの中で米国は、20年近くも、もがいている。思い出すのは、1970年代にヒットしたイーグルスというバンドの曲の「ホテル・カリフォルニア」である。この曲の歌詞は次のような内容である。疲れて、ホテルにたどりついた客が歓迎される。だが内部の異様さから客は去ろうとする。しかしチェックアウトはできるがホテルから決して離れることはできないと告げられる。

## [B チーム]

トランプの DNA は孤立主義的であり、対外軍事関与の縮小を指し示している。この終わりなき戦争というホテルを離れたいのである。ところが、その周囲には、この不思議なホテルの従業員のように、米国を戦争状態から逃さないようにしようとするグループがいる。イランのモハメッド・ザリーフ外相が B チームと呼ぶ人々である。まず対イラン超強硬派で知られる国家安全保障問題補佐官のジョン・ボルトンがいる。ボルトンの B である。そして、トランプと親しいイスラエルのネタニヤフ首相がいる。トランプを説得してイランとの核合意からの離脱を決断させた人物である。ネタニヤフ首相は、過去にイラン攻撃を主張したことが知られている。しかしイスラエルの国防・諜報関係者の反対で攻撃は回避されてきた。このネタニヤフのファースト・ネームがベンヤミンである。B で始まる。後二人の B は、サウジアラビア皇太子のムハンマド・ビン・サルマンとアラブ首長国連邦のムハンマド・ビン・ザイード皇太子である。どちらもビンで B がつく。サウジアラビアとアラブ首長国連邦はイエメンに軍事介入し、イランの支援を受けるフーシー派と戦っている。ウィキリークスが暴露した米務省の電報によれば、過去にサウジアラビアは米軍によるイラン爆撃を主張している。

このサウジアラビアがイランの反体制派組織モジャヘディネ・ハルク機構に資金援助を



行ってきた。この組織は、イランの現体制の打倒を訴えて来た。さらに、2017年に、この組織の集会でボルトンがイランのイスラム体制を攻撃する演説を行って「イランの現体制は打倒されるべきである」と主張している。この一回の演説の謝礼が4万2千ドルであった。日本円にして460万円ほどだろうか。サウジアラビアの資金が回り回ってボルトンの懐に入ったわけだ。参考までに付言すれば、この集会では、トランプ大統領の顧問弁護士であるジュリアーニ元ニューヨーク市長も演説している。

このモジャッヘディネ・ハルクは、1960年代の王制下のイランで結成された非合法組織である。王制の時代には、米国からの軍事顧問を殺害して広く一般にも知られるようになった。イラン革命期に公然と活動を始めたが、ホメイニ支持勢力との権力闘争に敗れた。その後のイラン・イラク戦争では、イラクのフセイン大統領の側に立って戦った。そのため、イラン国内では支持基盤を失ったと考えられている。フセイン体制の没落後に、サウジアラビアからの資金援助を受けるようになった。

サウジアラビアのワシントンでのロビー活動の恩恵を受けているのは、ボルトンやモジャッヘディネ・ハルクばかりではない。実は、ワシントンのシンクタンクの多くが、サウジアラビアの石油会社のアラムコや米国兵器メーカーからの多額の寄付を受けている。兵器メーカーは同国への輸出で莫大な利益を上げている。いずれにしろ、出どころはサウジアラビアのオイル・マネーである。シンクタンクの建物の巨大さに、豪華という表現さえふさわしいほどの立派さに、寄付額の大きさが推測される。となると、こうした研究所からは、同国の政策に批判的な論調の報告書は出にくくなるだろう。

さて、このボルトン補佐官、ネタニヤフ首相、ビン・サルマン皇太子とビン・ザイード皇太子の4人からなるBチームがトランプ政権を対イラン強硬路線へと導いてきた。そして前述の核合意からの離脱、対イラン経済制裁の再開と強化、イランの革命防衛隊のテロ組織指定などの一連の政策が発動された。

トランプの本来もっている孤立主義への性向とBチーム対イラン強硬路線が衝突している。もしボルトン以下がトランプを対イラン軍事力の行使へと変心させるような事態になれば、カリフォルニアの不思議なホテルの客のように、ますます米国は戦争から抜け出せなくなる。